

次の文章を読んで、後の問1～問6に答えなさい。

感情研究の^(注1) ニューウェーブ（新潮流）では、理性と感情は一体のものであると言われています。感情は、理性を含めた脳の認知過程のすべてに不可分な形で関わっているというのが、今の感情研究の考え方のです。

つまり感情は、理性にコントロールされているのではなく、（A）理性を支えている。これが、最先端の脳科学の考え方なのです。

感情を支えている古い「^(注2) 爬虫類の脳」も、実際には理性を司^{つかさど}

^(注3) 大脳皮質と密接に結びついて働いています。理性が感情を一方的に抑えるというよりも、両者は一体のものとして、手に手をとって機能しているというのが実際のところなのです。理性でも論理でも、使えるものは全て使う。感情と理性は、一緒になって何が起こるかわからない不確実性に対処してきたのです。お互いが分かちがたく結びついて、一体のものとして進化していくのはむしろ当然のことと言えるでしょう。

^あある場面で選択を迫られた時、「自分の直観を信じる」とよく言いますが、こうした選択を支えているのが実は感情です。

「^い最初のペンギン（first penguin）」という英語圏でよく使われる慣用句があります。ペンギンたちは、海に飛び込む時、足踏みをしてしまい、その場所でモジモジと^(注4) 滞留してしまいます。しかししばらくして最初のペンギンが飛び込むと、一斉に残りのペンギンも飛び込む。そ

ういう行動形態がよく見られます。

なぜペンギンがなかなか飛び込まないのかと言えば、海の中には餌^{えさ}になる魚などもいるけれども、同時にペンギンを食ってしまう恐ろしい天敵もいるからです。シャチ、オットセイ、アザラシ……。できれば他のペンギンが飛び込んでから、「指さし確認」でもして飛び込みたいところですが、グズグズしていたら餌を逃してしまいます。

つまり「最初のペンギン」という慣用句は、勇気を持って新しいことにチャレンジする人を指すのです。人生は、^(注5) 偶有性に満ちています。ペンギンたちも、人間社会で^(注6) パイオニアになる人たちも、偶有性の海へと飛び込んでいくのです。

ペンギンや人間のみならず、生き物は基本的に不確実性の世界で生きています。正解は何も保証されていません。しかしいつか決断し行動しなくては いけません。時間はもつとも貴重な資源であるからです。その時、最後に背中を押す直観を支えるのが、脳における感情のシステムなのです。

感情は理性の邪魔をするどころか、人生最大の課題である不確実性に対処するために最も重要なもののなのです。その働きに人は支えられているわけです。

極端な言い方をすれば、正解が決まっているものに対処するのに（A）は必要ありません。例えば、車は左側を走らなくてはいけないとか、1＋1＝2であるとか。そのような状況判断、問題解決には、単純な

る^(注7) ロジックを適用すれば良い。1+1=2かな、それとも3かなと、
一々人生の矛盾を一手に引き受けたような顔で悩んでいても仕方があ
りません。

(B) 人生で大切な問題であればあるほど答えはわからないもので
す。

大学はどこにしよう、就職先はどこにしよう、この人と結婚していい
のだろうか、最近会社でどうも辛い^{つら}のだけれども、思い切って転職して
しまいか、それともこのまま少し我慢するか……。

そういった人生にとって大事なことほど、答えはわからないものです。
それでは何をして決断せしめるかというと、そこに(イ)が必要に
なってくるのです。

実際、そのように悩んでいる時に、自分の感情がいろいろな意味で高
ぶってくるのを経験したことはありませんか？

不確実性は、人生にとってやっかいなものであることは事実ですが、
同時にそれは^(注8) 福音でもあります。ひらめきも、不確実性という背景
から生まれてきます。すべてが確定した状況にあるならば、ひらめきは
必要ありません。不確実だからこそひらめきが生まれる。答えがわかっ
ているものに、ひらめきはいらないのですから。

——茂木健一郎「ひらめき脳」より——

(注1) ニューウェーブ(新潮流)……新しい波。芸術・思想などで、
革新的な傾向。

(注2) 爬虫類の脳……大脳皮質の下の方にある進化的に古い脳のこと。

(注3) 大脳皮質……脳の部位。

(注4) 滞留……同じ所にとどまっていること。

(注5) 偶有性……偶然的な性質。

(注6) パイオニア……開拓者。

(注7) ロジック……論理。

(注8) 福音……喜ばしい知らせ。